

ありがとうの感謝の気持ち

小 六

私はスーパーでレジに並んでいるときに、

「自分でやるからやるな。」

と怒っている人を見かけた。大きな声に私はおどろいてしまった。声の方を見ると、怒鳴った人はお客さんで、小銭袋からお金を出そうとしているのを、店員さんが手伝おうとしているようだった。片手が不自由そうなその人は、使いやすい方の手で、ゆっくりとお金を出していた。案の定、少しずつレジに人が並び、店員さんも困り顔なのが私の目からもよく分かった。「そんなに怒らなくてもよいし、店員さんにやっ

てもらったらいのに。」と思った。私は店員さんに同情してしまった。そのときは、怒鳴る人の気持ちがよく分かなかった。でも、今ならその怒鳴った人の気持ちも分かる。そう思った出来事がある。

その出来事は、私が五年生のときに起きた。放課後、友達と公園で遊んでいるときに友達とぶつかり、ごう快に転んでしまった。体を支えるために、とっさに出した右手が、悲鳴を上げた。すりむいた両ひざと右うでの痛みに、思わず顔がゆがんだ。なんとか家に帰り、様子を見たけれど、右手の痛みが消えず、病院に行った。

「ねんざかね。」

と母と話していたので、先生の口から出た「骨折」の言葉に、私も付きそつ

ていた母も、固まったのを覚えていた。レントゲン写真を見せてもらおうと、右手の親指の延長線にあるうでの骨が折れてずれていた。ギプスで固定し、包帯を巻いてもらおうと、いくらか楽になった。しかし、まだある痛みのために息ばかりが出た。

初めての骨折生活は、とにかく不便だった。手を洗うのも、えん筆を持つのも、今まで簡単にできていたことができなかつたり、時間がかかったりした。こんなにも利き手が使えないのが、つらいとは思わなかった。けがをした初日は、ご飯をスプーンに乗せてもらい、左手で食べるようにしたけれど、やはり自分のペースで食べられないのは、苦しかった。いやな顔をせず、手伝えてくれた母に、ついイライラする

気持ちをおぶつけてしまった。学校でみんなが楽しそうに体を動かしていたり、友達同士で集まって楽しそうに折り紙をしたりしているのを見ると、右手が使えないから、みんなと同じようにはできないことがとてもつらかった。

不自由な生活を一週間続けて病院に行くとは、

「少しずつ良くなっているから、あと三週間かな。」

と診断を受けた。まだまだこの包帯生活が続くのかと思うと、もうやめてくれ、とさげびたくなった。小銭を出すのを手伝ってくれようとした店員さんに怒鳴ったあの人が頭にうかんだ。怒鳴ったあの人は、ものすごくどうしようもない怒りやもどかしさがあったのだと思う。気持ちがしずみ、またため

息が出た。

やる気もおきず、長い会計までの間、周りの人に目がいった。私と同じように包帯をしている人も、待合室にはたくさんいて、松葉づえをつきながら一人で診察に来て動いている人もいるし、リハビリで体を動かしている人もいた。待ち時間で、少しずつ冷静な気持ちになつた気がした。今できることを、できるはんいでやってみる、それでよいような気がした。家族や友達に手伝ってもらふことも多く、自分でやってきたことをやってもらうのが苦しかったけれど、お願いすることも必要だと思つた。同じ時間を過ごすのなら、気持ちを切り替えて、前向きにやってみようと思つた。周りの人が気づかかって手を貸してくれようとしているのだから、

ら、感謝の気持ちを忘れてはいけな
と思う。イライラした気持ちはよく分
かるけれど、怒鳴ってしまったのはよく
ないことだ。

状きょうを見て、その人の気持ちに
寄りそうことが必要なのだと思う。ど
こまで手を差しのべるのか、見守るの
か、その判断はとても難しい。まずは
相手を気づかうことが、みんなが幸せ
に生きていくためにできる第一歩だと思
う。さりげなく気づかってくれらるこ
とがどんなに支えになるか、骨折を通
して感じた。

私も、してもらつた優しさを、友達
や下級生、家族などに向けていきたい
なと思う。そして、助けてもらつたこ
きは素直に「ありがとう。」と言える人
になりたい。